

放射線だけを特別視しないで下さい。



除染作業

Q16 / 今回の福島事故はチェルノブイリ事故と同じレベル7ですが、同じように癌が増えるのでしょうか。

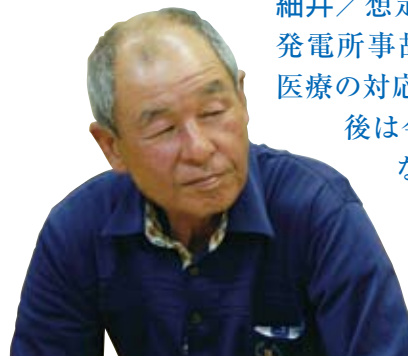
細井 / チェルノブイリでは相当の量が放出されたと言われてますが、それでも甲状腺癌以外の癌が増えたとする明確なデータは示されていません。福島の場合、放出された量はチェルノブイリよりかなり少ないですし、住民はすぐに避難しています。吸い込んだ量もごくわずかですから、1~2カ月で発症するような急性症状はもちろん、後々の発癌もないだろうと推測しています。

チェルノブイリ原子力発電所の事故

1986年4月26日にウクライナ共和国にあるチェルノブイリ原子力発電所の4号炉で起った爆発事故。爆発によって大量の放射性物質が大気中へ放出され、風に乗って世界中に拡散した。この事故は、後に決められた国際原子力事象評価尺度 (INES) において、最も深刻な事故である「レベル7」に認定された。

同発電所は、旧ソ連が独自に開発した黒鉛減速沸騰軽水圧力管型原子炉で、出力調整のための減速材に黒鉛を利用していることが特徴。また、圧力容器、格納容器といった封じ込め構造を持たず、低出力が続くと不安定になる特性があることから、急激に始まった原子炉の暴走を制御できず、事故に結びついたとされている。

Q17 / 今後われわれはどんな立場で、どのような情報に注意すれば良いでしょうか？



明石 真紀氏

細井 / 想定できなかったような今回の原子力発電所事故に対して電力会社、国、自治体、医療の対応が充分だったとは言えません。今後は今回の事態を教訓に、どんな深刻な事故が発生しても住民の安全が守られる体制を整備していくことが必要で、そのような体制づくりがなされていることを見守る必要があります。

最後に、放射線医療の専門家としての立場から、これだけは伝えたいということがあればお願いします。

細井 / 放射線は危険なものであることは確かですが、発癌の原因となるタバコ等と比べ、放射線に対してのみ特別に強い恐怖心を抱くことはバランスを欠いていると思います。放射線に対して正しい防護を行ってれば、放射線の危険性から自分を守ることはできます。医療に関してもエネルギー問題に関しても、放射線は極めて有効な手段です。

『放射線を正しく恐れ、正しく防護し、安全に使いこなしていく技術を確立していくことが、将来にわたる国民の利益のためにも必要だと思います』

インタビューを終えて

今回は青壮協のメンバーから放射線に対する疑問や健康への影響などの質問を出してもらい、実際に福島で医療活動をされてきた放射線の専門家である医学博士の細井教授にお話をうかがいました。科学者らしく正確な言葉で答えていただき、皆さんも納得してくれたと思います。

しかし福島事故は収束した訳ではなく、住民は未だに避難生活を続けています。こうした中で私たち上関町民は、より安全な原子力発電所の建設を強く求めていきたいと思っています。